

ライティングのプロジェクト型の帯活動

神原克典

(兵庫県西宮市立大社中学校)

1. はじめに

帯学習を取り入れることで、生徒たちに普通の授業で学んだ知識を実際に使う(復習・活用する)場を提供できる。本稿では、ライティングのプロジェクト型の帯学習を紹介する。

ライティング活動では、言いたい表現を探す中で、特定の文法項目を定着させたり、辞書や参考書といった学習リソースを利用させたりできる。まとまりのある文章を書く活動は、連続する数時間を使うプロジェクトで行うことが多いが、その一部を各授業の十数分に分散して帯学習で行うこともできる。

2. 実践例の紹介

—「トライやる・ウィーク」

(1) 帯活動の実施期間等について

中学2年生の1学期後半に(6月中旬から7月にかけて)、のべ10コマを、週4回の授業のうち、2～3コマの授業を用いて実施した(全コマではないのは、授業進度との兼ね合いから)。

作文を書き進める時間は、各コマ15分程度とした。後半の9コマ目、10コマ目あたりでは、制作物を仕上げ、クラスの仲間の作文の鑑賞会を行ったので、ほぼ授業時間の全て(50分)を用いた。

(2) ライティング活動のトピックについて

作文のトピックには、学校行事として実施された「トライやる・ウィーク」の振り返りを選んだ。「トライやる・ウィーク」とは、兵庫県で実施される、中学2年生が学校を1週間離れ、地域の中で職場体験を行う活動のことである。本校では、5月下旬に実施された。

(3) 目標(ねらい)と方法

生徒の作文は、清書したあと、「トライやる文集(Try-Yaru Report)」という名前で、作文集として印刷してまとめ、生徒全員に配布することを事前に予告した。その文集の鑑賞会をゴールとし、以下のような5つのステップを踏み、プロジェクト型—計10コマのライティング活動の計画を立てた。

時	活動の内容
1	idea map を書き、どんな内容の作文にするか
2	構成を練る【Step 1】
3	1～2文ずつ書き進めていく【Step 2】
4	
5	
6	
7	先生に提出した原稿を返却してもらい、文法的な誤りや表現方法についてのアドバイスを参考にrewriteする【Step 3】
8	イラストなどを含め、清書する【Step 4】
9	
10	印刷された「トライやる文集」を製本し、鑑賞会をもつ【Step 5】

上記の流れは大まかなものである。また、生徒によって作文を仕上げる進度が異なるため、rewriteについては、放課後のライティング指導を数回行い、個別の生徒の質問に対応した。

(4) 各活動の内容と指導について

a. 企画構成とidea mapの作成

「トライやる・ウィーク」でどのような事業所にお世話になり、どのような体験活動をしたか、印象に残ったことは何か、など、10文程度の英文で表現するため、idea mapを作成させた。まず大まかな構成を考えることから始めた。idea mapでは、事業所名を中心に置き、そこから枝分かれてして1週間の体験活動のハイライトを思い起こさせた。

次のようなidea mapをノートに書かせてから、下書き原稿に日本語文と英語文を書かせていった。



b. 作文

《下書き》 まず、日本語で言いたいこと（書きたいこと）を10文程度書かせた。その際、生徒にはできるだけ英語の語順で日本語を書くことを奨励した。

日本語文が10文完成したら、1コマに2文程度ずつ、英文を書いていく作業を進め、4コマ程度を用いて、下書きを完成させた。

【書き始めの例】

僕は / 行った / 小学校に / トライやるウィークで
I went to elementary school for Try-Yaru week.

《添削》 下書きの際、生徒たちは頻繁に辞書を引き、語句や例文を参考にしながら、言いたい表現を探し、書き進めていった。教師は机間指導しながら、生徒の質問に答え、適宜アドバイスを施した。40人弱のクラスの生徒数から、限られた時間内に全員の質問に答えることは難しいため、帯活動の最後に添削を希望する生徒は下書き用紙を提出させ、教師が英文にアドバイスを書き（動詞が過去形になっていない箇所にアンダーラインを引く／抜けている前置詞を書き足す／意味が通らない文に波線を引き、「？」マークを書く、など）、次時に返却した。

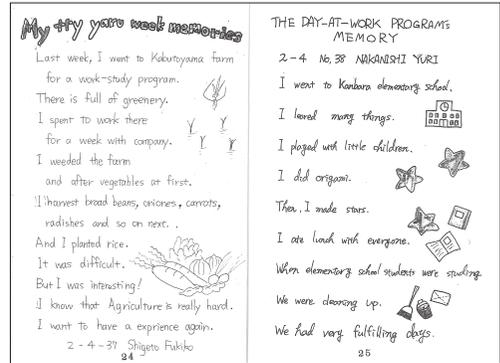
c. 口頭でのアドバイス・添削

中学2年段階の英語の文法事項と語いで表現できる内容は限られている。日本語でなめらかに書けることがそのまま英文にならない場合も多い。そこで、口頭や添削での生徒へのアドバイスは、出来る限り生徒が言いたい内容が何か、個々の生徒と対話した。その際、英語表現が複雑になりすぎず、かつ生徒も納得できる表現をとともに考えた。ただ、未習の英語文法（to不定詞／SVOO表現／受動態など）を用いたほうが適切だと判断した場合には、個々の生徒にその文法の構造を簡単に説明し、教師主導のアドバイスを施した。

d. 作文集の制作

下書きが完成した生徒から清書用紙を渡し、イラストやタイトルを付け加えて、文集用の清書を書か

せた。そして印刷した下書きを印刷し、授業の中で製本した。



e. 鑑賞会

製本した「トライやる文集」の鑑賞会を行うとともに、企画全体を通しての振り返りアンケート（自由記述方式）を実施した。

3. おわりに

今回紹介したライティングのプロジェクト型の帯学習は、主に生徒に過去形を使った文で自己表現をさせたいことが、当初の教師側のねらいとしてあった。その意図通り、多くの生徒が、errorを繰り返しながらも、過去形の文を書くことで、英語の時制についての知識を深めた。しかし、アンケート記述を読むと、単に過去形の理解が進んだということよりも、これまでに習った文法が実際に使えたという喜びや実感、日本語を英語に変換することの難しさと、それでもやり遂げた充実感などが書かれていた。細かく生徒が書いた英文を見ると、local errorが多く残っており、正確性をあげる課題は残っている。しかし、辞書を使って自分で調べさせたり、言いたい内容に寄り添って教師がアドバイスすることで、読み手を意識して英語で「表現しようとする」意欲が養われるのではないだろうか。

ある生徒の感想にこうあった。

「いつも作文などは日本語で書いていたのですが、英語になると一気に難易度が上がる気がします。けれど、自分が（日本語で）表現している言葉と一致する（英語の）単語を見つけるのはとても面白いと思いました。」

通常の授業も進めつつ、適宜帯活動を取り入れることで、このように感じる生徒を増やしていきたい。